2026年、観光立国から観光先進国へ

震災を乗り越え、「創造的復興」へ

和倉温泉の旅館経営者４氏が語る新たな宿とまちづくり計画

出席者（順不同）

谷﨑　裕氏（日本の宿 のと楽社長）

渡辺　崇嗣氏（加賀屋社長）

多田　直未氏（ゆけむりの宿 美湾荘社長）

奥田　一博氏（おくだや社長）

司会＝本社取締役編集長・森田淳

2024年元日の能登半島地震で壊滅的な被害を受けた石川県・和倉温泉。現地では「千年に一度」といわれる災害を「千年に一度のチャンス」にすべく、今までの課題解決も見据えた新たなビジョン策定、まちづくりがスタートしている。和倉温泉の現状と今後について、旅館経営者4氏に語っていただいた。（和倉温泉観光協会・旅館協同組合事務局で）

谷﨑氏

情報発信、雇用の維持が必要

「めぐる」テーマに新たな動き

皆が目標に向かい同じ目線で

「おもてなし」の軸をぶらさず

――（司会）震災発生から2年。現在の地域全体と、それぞれの宿の状況について伺いたい。

谷﨑　和倉温泉には旅館・ホテルが20軒あるが、現在開業しているのは9軒。残りは修理をしているなどの状況で、全てが完全に復活したわけではない。

当社は比較的早く、24年の11月から工事をしながらという形で営業を再開し、順次復旧を進めている。今も不備な点はかなり残っているが、とにかく営業をしていくことで、旅館の付加価値を高めながら整備していく形を取ることに決めた。まず復旧事業者の方々を受け入れ、その後、研修や見学の方々を一部入れ、施設が直ってからは観光客の方を少しずつ入れる形に方針を変えてきた。

他の旅館の中にも、同様に工事をしながら営業していくところはあるだろう。前に進まないと時間だけが過ぎていくし、時間がたつことによる風化で忘れられていくのが怖い。イベントなどをやりながら発信を継続していくことが重要だ。また、まったところだ。大まかな方向性は見えてきているが、現在は建設会社と費用や工期の問題を詰めている段階。金沢にある「金沢茶屋」や全国のレストランは稼働している状況だ。

多田　当館は、三つあった建物のうち一つを解体した。残りの一つを復旧事業者さん専用の館とし、もう一つの館で11月11日から一般客の受け入れを開始した。復旧事業者さんと旅行のお客さまの両方を受け入れながら、宴会なども再開している。その前に、まずできることとして、8月に1階で居酒屋をオープンさせた。少しずつできることを進めてきて、ようやく一般のお客さまを入れられるようになった。

――「和倉温泉創造的復興ビジョン・プラン」を策定した。その経緯やコンセプト、進捗状況について。

多田　これまで旅館が抱え込んでいたお客さまを、これからはどんどん外に出て、街を巡ってもらおうと協議会で発表し企業などに向けて復興プランの発表会を行った。20年前では考えられないことだ。それくらい、皆さんが一体となっている状況だ。

奥田　「和倉温泉創造的復興まちづくり推進協議会」が24年6月にスタートした。これは旅館だけでまちづくりを決めるのではなく、商店や住民の皆さんの意見をしっかりと合意形成しながら進めようという趣旨で始まった。

ハード面の課題はまだ多いが、約1年活動してきて変わったと感じるのは、和倉の空気が少しずつ変わってきたことだ。住民の皆さんも「今までの和倉も素敵だったけど、これからもっと創造的に復興していくんだ」というマインドに変わってきているように思う。例えば、商店街で新しく商売を始めたいという人が出てきたり、街全体で、「めぐる」というテーマの中で新しい動きが生まれ始めている。